

再歩

～再建までのみち～

ちかの ゆきこ
近野 幸子 さん (75)

行政区：市ノ城団地



震災前にはほとんどの家が二階建てだった住宅街。今では平屋建ての真新しい家が目立ちます。その一角に二階建ての近野さんの家がありました。

「38坪の自宅は本震で全壊しました。前震の後、自宅で寝起きできずと思っていましたが、二男が『危ないから』と家から連れ出してくれました。本震の時、家にいたら、たんすの下敷きになっていたところでした」

以前は、夫や長男家族総勢7人で暮らしていた近野さん。地震の後、近くの民間駐車場を借りて2戸のプレハブを置き、4か月間過ごしました。プレハブに冷房は付いていましたが、夏の暑さと雨の日の仮設トイレには苦労したと言います。お風呂は熊本市内の銭湯に家族風呂を借りて入るなど、不自由な思いもりましたが、「今では懐かしい思い出になりました」と笑顔で話してくれました。

「住み慣れたこの場所に帰ってくることで嬉しい」

昨年8月に木山仮設団地に入居しましたが、同じころ自宅の解体が終了し、すぐにでも自宅を建てたいと思つたそうです。建築業者がなかなか見つかりませんが、次男の連れ合いのついで、福岡にある工務店に来てもらえることになり、毎日遠くから通ってきてくれました。

今年の7月に新居が完成し、8月に長男家族と入居しましたが、持病が悪化

たご主人は自宅の再建を見届けることなく昨年12月に他界されました。

「新築したこの家を見せてあげられないことが残念です」と近野さんは言います。

家を建てる資金には、預貯金や生活再建支援金、義援金を充てました。家の広さは以前の家と同じ38坪です。

「間取りなどはほとんど長男夫婦が決めましたが、自分の部屋のつくりは自分で決めていきました。家族全員が一体

となつて建てた家です」
大きな災害に見舞われ、愛する人を失うなど大変なことが続きましたが、今の暮らしについて近野さんは、「日中は家族が仕事に出ているため、家事の全般を私が担っています。長男の家族と一緒に住むことがとても幸せです。近所の方たちも皆さん、自宅の再建をされています。仮設住宅の生活も楽しかったけれど、住み慣れたこの場所に帰ってくることで嬉しく思っています」と嘸みしめるように話しました。

新しい自宅を建てた後の近野さんの楽しみは、友人や元の職場の人たちと食



事に行ったり、木山仮設団地の集会所で習った折り紙細工を楽しむことです。作品は、ボランティアや知り合いにも譲ってあげ、とても喜ばれています。また、1日1時間歩くのも日課です。

自身の体験を通し、仮設団地では「できるだけ集会所で行われる行事には参加してほしい」と近野さんは言います。朝のラジオ体操や花植えなど、友人をつくる良い機会です。

帰り際にいただいた、折り紙で作った八角形の箱がとてもきれいです。製作中の近野さんのいきいきとした笑顔が目につかびます。

とても複雑そうに見えますが…。私にも作れるかな？ 難しそう…。

